

## 淀川水系流域委員会 第2回川上ダムサブWG 結果概要

開催日時：2004年9月3日（金）10：00～12：35

場 所：京都リサーチパーク西地区4号館2階 第1会議室

参加者数：委員15名、河川管理者（指定席）20名

一般傍聴者（マスコミ含む）16名

本稿は、議事の概要を簡略にまとめたものです。詳細の議事内容については、後日公開される議事録をご参照下さい。

### 1. 決定事項

- ・9/23（木）に予定されていた第3回川上ダムサブWGは開催内容を変更し、10：00～12：00に拡大学習会（対象は委員全員、河川管理者も参加可、一般傍聴者なし）、13：00～16：00に第5回ダムWGを開催する。

### 2. 審議の概要

注） 発言内容の冒頭の記号は、以下を意味しています。

リ）：リーダー ・：その他委員 ：河川管理者 傍）一般傍聴者

資料についてはホームページを参照して下さい。

発言内容の詳細については、議事録をご覧下さい。

「ダムワーキングと河川管理者との調整会議（8/30）」の概要報告  
榊屋リーダーより、8/30に開催されたダムWGと河川管理者との調整会議の概要報告が行われた後、今本委員より資料1-1「ダムWGの審議事項について」に関して説明が行われた。その後、河川管理者より資料1-2「ダムごとの調査検討項目」について説明が行われた。

主な論点に関する意見交換（降雨パターン、ダムの効果、代替案等）

榊屋リーダーより、資料2「川上ダム関係検討メモ（淀川部会の議論から）」を用いて、主な論点に関して説明が行われた後、意見交換が行われた。また、河川管理者より資料3-1「木津川上流域の降雨について」、資料3-2「河道掘削の効果について」についても説明が行われ、意見交換が行われた。

- ・資料2にあげられている検討項目は多すぎる。ダムWGでは、ダム建設の妥当性に論点を絞って検討した方がよいのではないかと。とりわけ環境や利水については、ダム建設の是非に係わるものについて、議論を行えばよいと考えている。

#### 降雨パターンについて

- ・実績降雨を対象とするのか、引き延ばし降雨（仮想の降雨）を対象にするのか。短時間で集中的に降った雨を引き延ばせば、当然、流出量は多くなる。安全度を考えれば、引き延ばし降雨を対象にした方がよいが、過大な降雨予測であるとの批判もある。流域委員会としては、実績降雨を対象に審議を進めていきたいと考えている。
- ・越水時に、現場である上野地区でどのように対応していくかということがポイントだ。堤内にどれくらい浸水するのか。どの程度の浸水時間なのか。そういったことをまとめた資料を河川管理者には提供して頂きたい。
- ・対象降雨として、昭和 57 年降雨（実績最大雨量）か、昭和 28 年降雨（流出量最大）のどちらを採用するかは、つまり、流域全体に降った降雨か、上流域に集中して降った降雨のどちらを優先して考えるかということではないか。

降雨パターンによって、流出量はまったく違って来る。確かに、昭和 57 年降雨のピーク流量はそれほど高くはなかったが、河川管理者としては、既往最大規模の昭和 57 年降雨で検討を進めていきたいと考えている（河川管理者）。

- ・これまでの河川整備計画は、確率洪水（引き延ばしとカバー率）を対象降雨としてきたが、計画流量が非常に大きくなってしまい、いつまでも整備が完了しないという問題点があった。そこで、流域委員会は「どのような降雨に対しても壊滅的な被害を解消する」と提言し、この点については河川管理者とも考え方が一致している。ただし、ダム建設の是非を検討していく上で、一応の基準とする降雨を設ける必要がある。これが現在議論になっている対象降水である。河川管理者の対象降水に対する考え方はこれまでも繰り返し説明を受けてきた。今後は、河川管理者と議論をするのではなく、流域委員会としての対象降水の考え方を河川管理者に意見していく他ないと思っている。

#### 代替案について（主に河道掘削について）

河川管理者より説明が行われた資料 3-2「河道掘削の効果について」に関して、意見交換が行われた。

- ・資料 1-2 では、川上ダムの代替案として、河道掘削や越流堤の諸元変更の検討が挙げられているが、これらはダムの代替案ではなく、治水事業の本筋だ。ダム建設の是非とは関係なく、きっちりと検討を進めていくべきだ。
- ・河道掘削を実施する際には、川らしい景観や環境、親水についても、考えていかなければならない。

木津川の河道掘削による下流の治水への影響はおそらくないだろう。また、河道掘削が環境に与える影響や橋梁付け替えや周辺道路へ影響を含めた事業コストの検討を進めていきたいと考えている（河川管理者）。

- ・木津川の河道掘削として、58.6km 地点で約 3mの掘削が検討されているが、この程度であれば、環境や景観に大きな影響は与えないのではないか。やはり、河道掘削は有

効だ。ダム建設の是非とは関係なく、遊水地と河道掘削を組み合わせたい検討をお願いしたい。

岩倉峡を現在のままで河道掘削をすると、掘削した箇所が一種の池のようになり、洪水後に水や砂が溜まる恐れがある。継続的な掘削が必要になるかもしれない。検討しなければならない事項だと思っている（河川管理者）。

- ・河道掘削を行えば、越流堤の高さも変わるが、これは考慮されているのか。

考慮した上での説明となっている（河川管理者）

- ・河道掘削によって、木津川がどのように変化するのはわからないが、景観については、周辺の住民とも議論をしていくべきだろう。また、掘削の際には、水陸移行帯も考慮しなければならない。

本日は河道掘削を中心に説明したが、実際の検討を進めていく際には、当然、考慮すべきことだと思っている（河川管理者）

- ・資料 3-2 で説明されている河道の掘削断面については、低水路をより緩やかにした方がよい。低水路を緩やかにすれば、川が緩やかに蛇行し、「川が川をつくる」を実現できるだろう。

ダムの効果について

- ・破堤を前提としていては、これ以上、議論は進まない。河川管理者は、越水しても破堤しない堤防を前提とした検討はできないのか。

堤防補強は非常に重要な課題であり、真剣に取り組んでいく。現在のところ、浸透と洗掘については、工学的な工法があるため、これまでも何度か検討結果を示している。しかし、越水による破堤については、ドレーンの周囲をカゴマットで覆うといった工夫はしているが、越水破堤を防ぐための体系的な検討はできていない。コンクリートで堤防を固めてしまえば、越水破堤を防ぐことはできるが、コストや環境への影響を考えた工法を検討していかななくてはならないと考えている（河川管理者）。

- ・破堤しない堤防を前提として、越水による浸水被害を流域対応でどこまで防ぐか。流域対応で無理なら、水位低下を目的としたダムを建設するのか。こういった事項は、今後、流域委員会が河川管理者に意見していくべきことであり、河川管理者に質問をしてもしょうがないことだろう。

- ・あらゆる洪水に対応するためには、堤防補強が何よりも重要だ。流域委員会は、「こういった堤防を作るべき」「こういう強化をすべき」といった指針についても意見していくべきだ。

- ・堤防強化委員会では、浸透と洗掘による破堤に関する議論しかなされなかった。越水による破堤を防ぐための堤防強化については、真剣に検討されていない。河川管理者の志の低さには不満を感じる。真剣に検討してほしい。

越水破堤に対する体系的な検討はできていない。真剣に検討していきたい。現在

は、越水破堤も考慮しながら、浸透と洗掘について対策をしている(河川管理者)。  
リ) 堤防強化委員会は、破堤のあらゆる条件を想定して検討すべきだった。破堤を回避するためのチャレンジ精神あふれる提言を期待していただけに、非常に残念だった。

その他

- ・ 史跡や遺跡は環境の一部と考えて、ダムWGで議論をした方がよい。関係者の中には、非常に敏感に反応する人も多いため、ダムWGの議論でも留意しておくべきだろう。  
環境の重要さは当然認識しているが、ダムWGでは、特化した議論を進めた方がよいと思っている。
- ・ 利水について、ダムWGでは「新規の水需要はない」という前提で審議を進めるとの説明があったが、非常に危険ではないか。将来に禍根を残さないか心配している。確かに、現在のところ水需要の増加は見込まれていないが、気象変動も懸念されており、将来的にどうなるかはわからない。現在検討中のダムは 100 年の視野で考えておくべきだ。

河川管理者から、利水の精査確認が示されていないため、現在のところ「新規の水需要はない」という前提で審議を進めざるを得ないと考えている。精査確認結果が示されれば、都度、対応していく(リーダー)。

今後のスケジュールについて

今後のダムWGの進め方について、榎屋リーダーより、「サブWGとはいえ、多くのダムWGメンバーに参加頂いて議論をしている。ダムWGでまとめて議論をした方がよいのではないか」との提案があった。これを受け、WG終了後、委員による打ち合わせが行われ、次回の川上ダムサブWG(9/23)に開催について、「1.決定事項」のとおりに決定した。

### 3 一般傍聴者からの意見聴取

一般傍聴者2名より発言があった。主な意見は以下の通り。

傍) 委員にのみ川上ダムの安全性(地質問題)に関する資料を配布した。昭和55年頃以降の水資源機構による調査資料等を検査した結果、川上ダムサイト付近に新しい活断層が確認できた。河川管理者は平成5年には認知していた事実ではないのか。河川管理者には、トレンチ調査を含めた綿密な調査を含めた、活断層に関する第2次調査を厳密に早急に実施して頂きたい。

川上ダムについてはこれまでに長期間の調査を実施し、その結果も公表している。事実や情報を隠しているということはない。河川管理者としては、これまでも説明を繰り返してきたとおり、ダムサイトに活断層はないと考えている(河川管理者)。

傍) 委員から「検討中のダムは 100 年の視野で考えるべき」との意見があったが、現在

進行中であるかどうかとは関係なく、ダムが必要なのかどうかについて、審議をしてほしい。また、委員から利水について「100年後のことまで考慮して、新規の水需要をゼロとして考えるべきではない」との意見があったが、今後の利水計画は、水需要コントロールを中心に考えていくべきというのが流域委員会の提言だった。これを考慮して審議を進めてほしい。

以上